

天武天皇 上

【之】

02

以痛之甚矣  
痛みたまふこと甚し

而慎之  
慎みたまふ

乃辭讓之  
乃ち辭讓(いな)びて

臣之不幸  
臣が不幸(さいはひ)なき

天皇聽之  
天皇聽(ゆる)したまふ

03

送之  
送りたてまつる

虎著翼放之  
虎に翼を著けて放(はな)てり

04  
至吉野而居之  
吉野に至りて居(おは)します

謂之  
謂りて

故隨欲修道者留之  
故に隨ひて修道(おこなひ)せむと欲ふ者は留  
(とどま)れ

11

天皇惡之  
天皇惡む

13

天皇從之  
天皇從ひて

惠尺馳之  
惠尺馳せ

志摩乃還之  
志摩は乃ち還る

而行之  
行(いでま)す

乃皇后載輿從之  
乃ち皇后輿を載せて從(みとも)にま)せしむ

時天皇異之  
時に天皇異(あやし)びたまふ

高市皇子自鹿深越以遇之  
高市皇子、鹿深より越えて遇(まうあ)へり

以皇后疲之  
皇后の疲れたまふを以て

於是寒之雷雨已甚  
是に寒くして雷なり雨ふること已甚(はなはだ)  
し

山部王石川王並來歸之  
山部王、石川王、並に來歸(まうよ)れり

14

是時益人到之  
是の時に益人到りて

乘跡而逐之  
跡に乗りて逐はむには

即殺之  
即ち殺せ

頓社稷傾之  
頓(ひたぶる)に社稷傾(かたぶ)きなむ

而空還之  
空しく還りぬ

以後之緩行  
後れて緩(ようや)くに行く

磐鍬見之  
磐鍬見て

15

歸之  
歸(よ)りまるつ

天皇即美之  
天皇即ち美(ほ)めたまひて

乃逃還之  
乃ち逃げ還りぬ

爰天皇譽之  
爰に天皇譽(ほ)めて

則天皇祈之  
則ち天皇祈(うけ)ひて

即雷雨止之  
即ち雷雨止む

17

天皇亦還于野上而居之  
天皇亦た野上に還りて居(ま)します

大伴連吹負密與留守司坂上直熊毛議之  
大伴連吹負、密かに留守司坂上直熊毛と議  
(はか)りて

自飛鳥寺北路出之臨營  
飛鳥寺の北路より出でて營に臨む

乃汝内應之  
乃ち汝内應(うちあひ)せよ

自南門出之  
南門より出づ

而乘馬馳之  
馬に乗せて馳せて

時百足下馬遲之  
時に百足馬より下るること遅し

斬而殺之  
斬りて殺す

俄而赦之  
俄(しばら)ありて赦(ゆる)して

天皇大喜之  
天皇大きに喜びたまふ

18

自伊勢大山越之  
伊勢の大山より越えて

撃追之  
撃(う)ちて追はしむ

19

將軍從之  
將軍從ふ

堅於京邊衢以守之  
京の邊の衢(ちまた)に堅(た)てて守る

21

以夜半之  
夜半を以て

仍拔刀而毆之  
仍りて刀を抜きて毆(う)ち

足摩侶衆悉亂之  
足摩侶が衆(いくさ)悉(ふつく)に亂る

唯足摩侶聰知之  
唯だ足摩侶のみ聰(と)く知りて

22

爰將軍多臣品治遮之  
爰に將軍多臣品治遮(た)へて

以精兵追撃之  
精兵を以て追撃す

23

破之  
破る

24

斬之  
斬りつ

26

丙午栗太追之  
丙午、栗太の軍を討ちて追ふ

27

以先鋒距之  
先鋒として距(ふせ)ぐ

急踏板度之  
急ぎて板を踏(ふ)みて度(わた)る

衆悉亂而散走之  
衆悉く亂れて散(あら)け走(に)ぐ

以逃之  
逃げぬ

共攻三尾城降之  
共に三尾城を攻めて降しつ

28

唯物部連麻呂且一二舍人從之  
唯物部連麻呂、且(また)一二の舍人のみ從へり

而登之  
登(た)つ

爰韓国到之  
爰に韓国到る

29

以特率一二騎走之  
特(ただ)一二の騎を率て走(に)ぐ

騎士繼踵而進之  
騎士繼踵(しき)して進む

則近江軍悉走之  
則ち近江軍悉く走(に)ぐ

將軍遙見之  
將軍遙に見て

各當上中下道而屯之  
各上中下の道に當りて屯(いは)む

近江將犬養連五十君、自中道至之  
近江の將犬養連五十君、中道より至りて

以進射之  
進みて射る

以逃之  
逃ぐ

甲斐勇者馳追之  
甲斐の勇者馳せて追ふ

即馳之  
即ち馳せて

而軍之  
軍す

30

乃顯之  
乃ち顯して

而守護之  
守護(まも)りまつる

自西道軍衆將至之  
西道より軍衆至らむとす

而奏之  
奏す

34

以餘悉赦之  
以餘(これよりほか)は悉に赦す

自死之  
自ら死せぬ

【者】

15

天神神祇扶朕者  
天神地祇、朕を扶(たす)けたまはば